学校ボランティア通信（平成28年2月26日）平成27年度第7号　学校ボランティア支援室

自分の行動が反省できるような言葉かけ…

的を射た言葉やタイムリーな言葉かけ，これが難しい…。ボランテイア学生は，実体験で学びます。

郡山市立芳山小学校編

『**障害児教育は，教育の原点**』と言われます。それは，できない原因，できるために必要な能力，覚えるための行動をものすごく細かく分析し，それぞれに対応しているからじゃないか，と思われます。

今回の通信は，特別支援学級で学生ボランティアに参加している 3 年生と，4 月 1 日から教壇に立つ直前の 4 年生（共に郡山市立芳山小学校）に原稿を依頼しました。

【郡山市立芳山小学校】

子どもたちとのかかわりを通じて

人間発達文化学類人間発達専攻

3 年　**鈴木　真愛**

私は郡山市にある小学校の特別支援学級で学生ボランティアの活動をしています。教育実習やこれまでの学校の授業を経験して子どもとのかかわり方や支援の在り方が分かったつもりでした。そして，これらの経験を活かして子どもたちとかかわる機会を増やしたいと思い学生ボランティアを始めました。現場に入ってみると，障害の程度が異なる子どもが教室で一緒に生活して，その中で自分がどのようなサポートをしたらよいのか戸惑いました。自分の立ち位置やサポートの仕方，子どもたちにとって学生ボランティアがどのような存在であるべきなのかを捉えることができず学生ボランティアの在り方に悩みました。しかしボランティア支援室にいらっしゃる齋藤先生や荒木先生に，ボランティア活動での出来事を自分の働きかけや担任の先生の子どもへの支援や対応を踏まえてお話ししていく中で子どもたちの性格や傾向を整理することができ，わたしなりに子どもたち一人一人を感じられるようになりました。

【写真は，文章と直接関係ありません。】

学生ボランティアとして子どもたちの間に入ると，それぞれに違う子どもたちの「困っていること」が見えてきます。障害そのものに困難を感じるのではなく，直面している問題にどう対処したらよいのか，また自分が何に対して困っているのかが分からないことに子どもたちは難しさを感じることがあるのだと実感しました。学生ボランティアという教員とは違う立場で子どもたちの間に介入させてもらっているので，担任の先生とも情報共有をしていくことで子どもたちの課題を少しでも小さくできればと思っています。そしてわたし自身，担任の先生の子どもたちへの支援やかかわる姿を見て特別支援教育についてもっと学んでいきたいと思います。

漢字ワーク：児童にワンポイントアドバイス

自力で風車づくりする児童を見守り支援

【郡山市立芳山小学校】
学校ボランティアを振り返って

人間発達文化学類人間発達専攻
4年　吉田江里

私は，採用試験を終え10月から学校ボランティアを再開しました。

活動も残りわずかとなる中，学校ボランティアをやってよかったと感じることを紹介します。

まず，教育実習とはまた違った，子どもとの長期的な関わりを持てたことです。私は現在，1年2組に入らせていただいています。週に一度ではありますが，継続的に学級に入り，児童理解に努めてきました。徐々に着替えが早くなったり，縄跳びで跳べる回数が増えたりといった変化を目にし，子どもたちの「成長する力」を実感しています。実習では高学年担当だったので，その経験も踏まえ，教師の関わり方や学習面においてのつまずきなど，発達段階による違いについて理解を深めていくことができました。

次に，活動を通して自分の課題を発見し，実践的に学んでいけることです。最近は指示を出したり，指導したりする上で「毅然とした態度」で子どもに接する場面の重要性と，それをなかなか思うように実践できないということを痛感しています。このような自分の課題意識を持ちながら，担任の先生の様子を見たり，お話したりするなかで，指示は端的に，指導を行う際は子ども自身が，自分の行動を反省できるような言葉かけを行うことが大事なのではないかと考えるようになりました。学校ボランティアでは，その時々で自分の課題や学び取ることが変化していくと感じます。最近は，4月からを意識し，授業や子どもとの関わりだけでなく，学級掲示や係活動，当番活動などがどのように行われているかにも着目するようになりました。

学校ボランティアの活動を通して，目の前の子どもにどう向き合うか，そして教員としてどのようなことを大切にしていきたいかを考えながら活動してきました。4月からは，学んだこと・考えてきたことを活かし，子どもたち一人一人と信頼関係を築きながら，子どもたちと一緒に成長していけるような教員となれるよう，努力していきたいと思います。